

# 複言語・複文化活動を通した共同体での発展的学び

— 連携型アクションリサーチの試み —

吉 田 真 美  
 畑 田 彩  
 梶 川 裕 司  
 河 上 幸 子  
 南 博 史  
 中 山 智 子  
 島 村 典 子  
 村 上 正 行

## 〈Summary〉

Based on the perspectives of plurilingualism and pluriculturalism, this paper provides an overview of multiple attempts of community collaboration designed both in and outside the curriculum for university students studying foreign languages and related topics. In a community-based participatory research (CBPR) approach, it also intends to assess the impacts of these programs on the students in addition to their language acquisition and disciplinary knowledge focusing on such elements as developing their autonomy, collaborative growth, citizenship, and international professionalism.

The paper consists of the following five project reports: 1) a multicultural and multilingual picture book reading project at the library (Nakayama and Yoshida); 2) community engagement activities as part of university curriculum in collaboration with the local community (Kawakami and Kajikawa); 3) science communication at a liberal arts university (Hatada); 4) community engagement activities as part of field museum initiatives (Minami and Kajikawa) 5) language study tours in collaboration with university students, international students, and high schools (Shimamura and Minami); and 6) an elementary school English volunteer project (Yoshida) (see Table 1). With an overview of each program, the learning effects of the program and its impact on the community are examined and their challenges and implications are discussed for future studies.

Instead of sticking with the conventional style of foreign language education from a monolingual perspective, the implementation of comprehensive field-based plurilingual activities were found to be meaningful not only for university students, but also for the local community, which is becoming increasingly multilingual and multicultural.

## はじめに

社会経済のグローバル化が加速し、日本は本格的な多文化共生社会の時代を迎えた。異なる価値観や習慣を持つ人々と協力し、よりよい社会を築くことができる人材の育成が日本社会の喫緊の課題であり、高等教育にも求められている。均一的な集団による学びを前提とした従来のような知識伝達型の授業や教育機関での実習では、このような能力をもつ人材育成は望めず、異文化や外国語学習への興味がある外国語系・国際系学部の学生であっても、多様な言語文化的背景を持つ人とつながる環境を主体的に探すことは容易ではない。多様な背景を持つ人々と交流し協働することで、異文化や多様性についての理解を深め、体験を振り返ることで、新たな課題を見つける過程が成長の糧となる。そのような場を大学が提供することに意義がある。

そこで本稿では、外国語系・国際系学部の学生が参加した、地域との連携による協働活動から、語学能力の向上や専門知の修得のみならず、自律性、協働的成長、市民性や国際的専門性の育成を目指した様々なタイプの教育プログラムの概要とその教育効果について報告する。実施したプロジェクトは以下の通りである（表1参照）：1）図書館での多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト（中山、吉田）；2）地域との連携による正課教育としてのコミュニティ・エンゲージメント活動（河上、梶川）；3）博物館活動を通じたコミュニティ・エンゲージメント活動（南・梶川）；4）文系大学におけるサイエンス・コミュニケーション（畑田）；5）大学生・留学生・高校生・高校との連携による語学スタディツアー（島村、南）；6）小学校英語ボランティアプロジェクト（吉田）。

表1：共同体との連携型プロジェクト

プログラム名	多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト	コミュニティ・エンゲージメント活動	文系大学におけるサイエンス・コミュニケーション	大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー	小学校英語ボランティア
プログラムタイプ	体験型プロジェクト（正課外）	地域調査・貢献活動（正課）	児童館でのプロジェクト実施（正課）	宿泊を伴う交流および発表活動（正課外）	学習支援体験（正課外）
実施場所と期間	単発の活動・近隣の図書館	①地域に泊まり込みで5週間 ②現地月1回3～5日を5回実施	単発の活動・近隣の児童館	①単発の活動・地域の活動拠点 ②2泊3日	月に一回の定期的な活動と、単発の活動：近隣の小学校

対象学生	専攻する言語が異なる学生（英語・中国語・フランス語・ポルトガル語・イタリア語・ドイツ語）	観光学科の2年次生	サイエンスコミュニケーションを受講する3, 4年生	中国語を専攻する日本人大学生・高校生、日本語を専攻する中国人留学生	主に教職課程の学生
連携機関	近隣の図書館	地域コミュニティ、役場、企業、観光公社、NPO、大学など	Y児童館	福井県越前町熊谷の地域住民交流センターおよびその周辺	京都市、高槻市内の小学校
目標と概要	言語・文化の壁を越えた協働活動を通して、多文化共生社会のあり方について考え、次世代に伝えたいことを模索してもらう。	一定期間、地域社会での暮らしやその地に根ざした活動を通して問題を発見し、その解決に貢献できる人材育成を目指す。	反応が分かりやすい子どもを対象に、紙飛行機を題材としたプロジェクトを実施。科学的バックグラウンドの代わりにコミュニケーション能力を持つ外大生が、サイエンスコミュニケーターとしての経験を積む。	高大連携による交流・発表活動と地域貢献作業。外国語でのコミュニケーション能力の向上と異文化理解力・社会人基礎力の育成を目標とする。	小学校での外国語活動を実施。教職に就く学生の指導力向上と児童の英語への動機づけと国際理解を目指す。
評価方法	学生へのインタビュー、来訪者へのアンケート	参与観察および実習中の面談、学生へのアンケート、学生が書いた毎日の活動記録、LINEでのやりとりの記録、地域住民へのポスター発表・口頭発表	学生アンケート、児童へのアンケート	参加学生へのアンケート、連携機関協力者へのインタビュー	学生へのインタビューと学生アンケート、児童へのアンケート

## 1. 背景

### 1.1 複言語主義、複文化主義の視点からの外国語大学を目指す教育とは

これからの時代に必要とされる外国語能力とは、実社会において、課題を自ら探り、解決に向けて、異なるバックグラウンドを持つ組織や個人と連携し、言語・文化の壁を越えた協働活動を展開したり、境界線を乗り越えたりするために、単一言語文化を規範とする教育を超えて、複言

語を組み合わせる学びあう能力である。社会や個人のニーズに合わせて、複数の言語やその背景にある文化的知識を運用するというこの行動主義的な考え方は、言語を学ぶ目的と手段を明確にしようとするヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR：Common European Framework of References for Language）の理論的な柱である複言語主義の考え方である。

しかし、こうした学びを提供するためには、教室内での外国語学習だけではもはや十分でなく、外国語を学ぶ学生とそのニーズをもつ地域社会を有機的に結び付け、相互作用的にインパクトを与えあい成長することができる共同体が必要かもしれない。地域社会と教室を結び付けることで、学生同士の協働、または地域との協働による学びが学生の成長及びさらなる外国語学習への動機付けに寄与すると考えられる。そこで外国語系および国際系学部が、複言語主義、複文化主義の視点から、複言語をベースとした学外機関との連携による協働活動を経験する機会を設ける教育的意義は大きいと考える。

## 1.2 プロジェクトの枠組み：参加型アクションリサーチの可能性

異文化間の接触を参加者及び社会にとって意義ある学びとするためには、参加学生側の成長だけではなく、受け入れる側である地域コミュニティやその他連携組織や関係者も含めた双方の互惠性を追求する必要がある。異なるコミュニティ間を繋ぐ人材に育成すべく、学生が様々な関連機関と連携し、また個人資源を活用し、課題解決のために自ら地域コミュニティに働きかけるという体験を、自らの学びとしてだけでなく、地域コミュニティに還元できる知見を可視化することも重要である。そのために、コミュニティを基盤とした参加型アクションリサーチ CBPR（Community-based participatory research）をプロジェクトの枠組みとして用いる。CBPRはそもそも欧米の人種問題を背景とした地域の格差問題の是正やマイノリティのエンパワメントといったアプローチとして概念化されたもので、日本でも地域での福祉や看護、保健活動といった分野で活発に行われている（武田 2015-a, b）。参加型評価も含めたりサーチのすべてのプロセスにおいて、コミュニティの人達にも参加してもらい、共同体のメンバーと大学側の間の対等な協働によって生み出された知見をコミュニティのウェルビーイングの向上や問題・状況改善のために活用することを目指す。このアプローチを応用することによって教育プロジェクトと地域コミュニティプロジェクトのフィールドを架橋することができることが期待される（図1参照）。

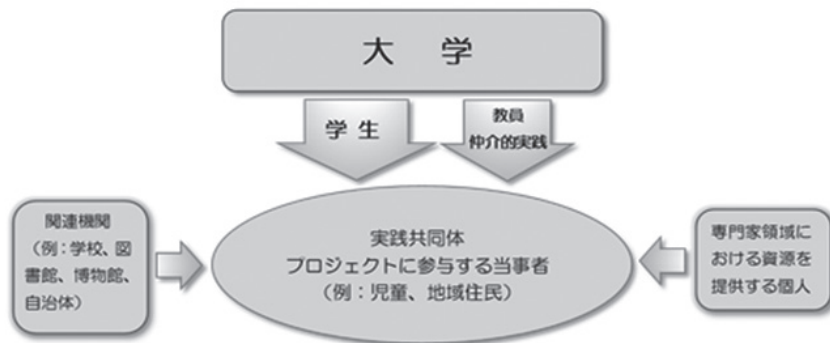


図1：参加型アクションリサーチにおける共同体の連携イメージ

### 1.3 研究課題と分析方法

本稿では、大学と地域コミュニティ、またはその関連機関との連携による協働体験プロジェクトにおいて展開される協同学習及び、プロジェクト型学習について、以下の3つの視点から有効性を考察する：①外国語専攻の学生が専攻語を用いて行う協働プロジェクトの可能性②国際系学部の新課プロジェクトとして行う地域貢献活動の課題と有効性③教養科目としてのプロジェクト型の学びの可能性と有効性。

①外国語専攻の学生が専攻語を用いて行う協働プロジェクトの可能性と学びの可視化については、「図書館での多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト」(2.1節)や「大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー（島村，南）」(2.5節)において、専攻する外国語を用いて社会につながることが、専攻する言語の学習にどのような効果をもたらせるのかということに注目する。また、「小学校英語ボランティアプロジェクト」(2.6節)では、専攻語への学習意欲だけでなく学生のキャリア形成への影響についても考察する。

②国際系学部の新課プロジェクトとして行う地域貢献活動の課題と可能性については、「地域との連携による新課教育としてのコミュニティ・エンゲージメント活動」(2.2節)と「博物館活動を通じたコミュニティ・エンゲージメント活動：越前フィールドミュージアム (2.3節)」で展開された活動を通して新課としてカリキュラム化する上での有効性と課題を考察していく。

③教養科目としてのプロジェクト型の学びの可能性と有効性については「文系大学におけるサイエンス・コミュニケーション」(2.4節)において展開された活動が外国語専攻の学生にとってどのような学びを提供するかを考察し、また今後の教養教育の可能性を検討する。

またそれぞれのプログラムカテゴリーの中での、活動に関する理念、プログラム作り、学習内容、共同体との関係、成果や評価の在り方についても考察したい。プログラム作りについては、新課、新課外のそれぞれにおいて、プログラムデザイン（事前指導及び準備事後指導含め）や運営に関する課題、学内体制づくりへの示唆を得たい。学習内容については、実践経験がもたらす学びを質的及び定量的なデータ分析の両方から考察していく。特に外国語学習との関係や授業内

容とどのように実践が結び付けられるのか示唆が得られるであろう。また、共同体との関係という点で、受け入れ先との関係構築（共同体づくり）における課題やフィールドワークの実施上の課題から学外体制及びそれを支える学内体制への示唆を得たい。最後に活動の成果の共有や評価として、成果物の作成や共有といった学習者にとっての学習成果の可視化と、変化、成長、変容プロセスといった学習者への教育効果の評価方法の是非についても検討していく。前者に関しては、成果発表や、冊子又はホームページ作成など成果物の作成などの方法論を、後者に関しては、学びの成果を評価するための評価尺度（各自ルブリック、振り返り、共通アンケート）を用いるとともに、共同体への影響（変化、影響、課題）を考察する方法論も検討する。

#### 1.4 実践の評価のためのデータ収集方法と指標作成の試行

本稿は、各実践内容の報告と、今後の活動の展開方法を考察するための示唆を得るという予備調査の段階の報告であるため、実践による教育効果及び共同体に与える効果を質的及び量的なデータ収集を用いて、探索的に分析を行う。量的なデータ分析としては、活動前と活動後での学生の変容を考察するために尺度を開発し、コミュニティ・エンゲージメント活動、サイエンス・コミュニケーションに関しては定量的な調査も行った。また、学びの効果における質的な側面にも注目した。執筆者による観察に加え、記述式アンケート（大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー）や面接法（多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト、小学校英語ボランティア、コミュニティ・エンゲージメント活動）などによってデータを収集した。また、学習記録としての映像や日誌など体験を通じた学びを可視化し、振り返るための記録なども考察の対象にした。

本研究の5つの実践研究は、千差万別の取組であるが、学生に身につけさせようとする資質の観点から見れば共通性がある。そこで多様な活動の成果を評価するための客観的指標作成のための基礎資料の収集を目標として質問紙を作成した。そのため活動参加によって学生に生じると推測される要素を測定するための項目を設定した。具体的には、①行動の特性（1～4）、②情緒面の特性（5～9）、③自己認知（10～15）、④参加への動機づけ（16～26）、⑤思考方略（27～39）、⑥多様性の理解（40～48）、⑦自己効力感（49～60）である。これら項目で活動参加の事前と事後に調査を行い、その変化の有無と方向性を知ることとした。項目作成にあたっては、梅本他（2016）の感情的・行動的エンゲージメント尺度、中西（2004）の自己効力感尺度、沼田（2010）の多様な価値観尺度の項目を抜粋し採用している。以上の趣旨で作成した質問紙を巻末に示した。

なお質問紙は試行版であるため、これをベースにして、取組担当者が、利用の際、不必要と考える項目の削除、必要項目の追加、設問の改変を広く認めた。そのため本報告では、すべての研究を合算した分析は行わず、一定の調査対象が確保できた研究に関して分析結果を記載した。



## 2. 事例

### 2.1 図書館での多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト（中山，吉田）

#### 2.1.1 目的と概要

本プロジェクトは、多様な言語を専攻する学生が地域の子どもを対象とした多文化・多言語の紹介イベントを実施したボランティア活動である（2020年1月京都市立中央図書館で実施）。子どもたちに世界の多様性や日本の多様性を知ってもらうことに加え、企画・実施する大学生自身に、地域の図書館と連携・協働を通して、自分たちが次世代に伝えたいことを模索してもらい、現在と未来の多文化共生社会のあり方について考えるきっかけを与えることを目的としている。

日本各地での図書館や保育施設・小学校などでの多文化・多言語絵本読み聞かせの実践例に着想を得て<sup>1)</sup>、企画書を作成、京都市の図書館に連絡を取り、2019年8月図書館での打ち合わせを経て、京都市中央図書館でイベントを実施させてもらうこととなった。学生のグループ作りのためのチラシを作成・配布し、2019年秋学期開始から、中山，吉田，そして科研の共同研究グループメンバーである島村が学生に呼びかけた。集まったメンバー9名は、後述の表2にあるように学科、学年とも多様性を持ったグループとなった。具体的なイベント内容の打ち合わせは、平日の昼休みに合計12回（10月～1月）行った。学生同士はLINEでつながり、出席できない時もLINE上で意見を出したり、細かい打ち合わせを行ったりしていた。小学校英語ボランティア経験者（後述5）小学校英語ボランティアプロジェクト参照）が積極的にリーダーシップを取り、進行台本や配布用のしおりの作成なども学生が行った。

当日のイベントは以下のプログラムで行った。会場準備と司会進行もすべて学生が行った。

日時：2020年1月19日 会場：京都市中央図書館1階 児童図書室

#### 1. 未就学児向けの回（約30分）

- ・絵本読み聞かせ（日本語のみ、または日本語と外国語）
- ・ふりつき歌（英語と仏語）
- ・歌「Happy Birthday」（言語：英語、独語、仏語、伊語、中国語、ポルトガル語）

#### 2. 小学生向けの回（約50分）

- ・絵本読み聞かせ（日本語。各国の年末とお正月の過ごし方について）
- ・歌「Let It Go」の多言語バージョンの紹介
- ・各国のクリスマスとお正月の紹介とクイズ
- ・絵本読み聞かせ（英語、独語、仏語、伊語、中国語、ポルトガル語）
- ・じゃんけん大会（独語、仏語、中国語、ポルトガル語）参加者には外国の硬貨をプレゼント）

#### 2.1.2 調査と結果

本実践が共同体（地域や図書館）、及び学生の学びに与えた影響を考察するために、データ収

集を行った。共同体に与えた影響については、イベント参加者に筆記アンケートを行った。図書館側からはコメントをいただいた。学生の学びに与えた影響については参加者全員に半構造化面接を事後に行った。

#### 2.1.2.1 共同体に与えた影響

当日は約34名の来場者（子ども20名、大人14名）があり、イベント終了後も子どもが学生に質問したり、社会人の来場者が「毎月行ってほしい」とリクエストされるなど、非常に好意的な反応が得られた。終了後の図書館職員の方を交えての反省会では、「(留学生とのイベントの時より身近に感じて) 子どもが学生に積極的に話しかけていた」というコメントもいただいた。また想定していた年齢層の参加児童と実際参加した児童の年齢層が異なったことから、今後の地域への働きかけの方法を再考する必要があることが指摘された。

アンケートは選択型の設問が2項目（イベントへの満足度と次回以降の参加の意向）と自由記述が2項目（今後参加を希望する理由と、今後の活動への提案）であった。回答は14組の家族であった。イベントへの満足度に関しては満足又は大変満足が14回答中13回答あった。次回のイベントへの参加については14回答全て希望を示していた。その理由として、ジャンケンや体を動かす活動を取り入れ、子どもが興味を持つような楽しく、日本語+多言語で読んで分かりやすい工夫で絵本に触れる機会を与えていたことや、学生が一生懸命子供たちと交わっている姿に好感をもってもらえたようである。また以下のような多文化、多言語の理解という点におけるコメントが多くみられた：世界に言語や国を、絵本や歌や身近な例で分かりやすく説明したこと、自国以外の文化や言語の美しさ、楽しさに触れることができ興味の幅が広がった：外国語が美しく響いた、外国のコインから国を想像できた。

#### 2.1.2.2 インタビュー結果から：参加学生の学びについて

9名の協力者に対して、活動終了時に半構造化面接を実施した。本調査の対象者は、本プロジェクトに参加したメンバー9名である（表2参照）。面接は一人あたり30分程度であった。事前に対象者の許可を取った上で会話は全て録音された。以下のインタビューガイドラインを用いて準備及び当日について質問したが、そこから発展した補足的質問も行った：参加動機、やり終えた感想、どのような学びになったか、改善点（準備、当日）、教員のかかわり方、難しかったこと、意外だったこと、よかったこと、大事にしたこと、他学科他学年と混じって気づいたこと、活動を良くするための提案、多文化理解・多文化共生についての興味や経験。

#### 2.1.3 結果分析と示唆～専攻語を使う活動への興味と多文化共生への体験的理解～

今回参加した学生の特徴として、スピーチコンテストや、通訳、ボランティアなど専攻語を用いる活動に積極的に参加していることや、教職や図書館司書など、教育や図書に携わる活動を進路の一つとして選び履修していることや、子供好きな学生が多いことが挙げられる。さらに、参



加動機として複数言語・複文化を背景に持つ子供たちへの支援の重要性について、学習経験や交流経験から高い意識を持っていることも示されている。またほぼ全員が専攻語の異なる学生同士の交流から得られる多言語面または文化面の知識を得たことを報告している。それに加えて人前で話すスキルや未就学児への接し方について自信を持てたことも多く報告された。

学びについてのコメントで特徴的だったのはほぼ全参加者が、これまで「学ぶ」対象であった専攻語が、この活動では学んだ知識を生かして「教える」または「他者に発信する」対象となったことを意識しており、それによって得られる達成感を報告していたことである。さらに多言語多文化の活動ができることが外大ならではの学びであると指摘したり、仲間の優れた実践力やリーダーシップから受ける刺激に加え、参加した子供や保護者の反応も大きな励みになっていることが全員から報告された。

この活動が子供たちに多言語や多文化を身近に感じてもらう機会になっていることや、地域の誰もが利用する図書館が活性化することなどを報告した学生が多く、この活動が参加した学生だけでなく、共同体のメンバーである、地域や参加者への効果を与える可能性への気づきを促したことも注目すべきであろう。学生たちは準備期間中、外部の施設を利用して情報収集を集めたり、著作権の関係で使用できなくなった素材の使用方法を検討するなど様々な局面で自ら工夫を重ねてくれた。外国語学習の動機は、多くの場合、個人的興味や留学、就職など自分自身のためであるが、学びが「自分のため」だけでなく「誰かのため」になった時、行動する大きな力を与えることを示唆している。

表2：参加学生のプロフィール

協力者	専攻	学年	参加動機やその他の活動
A	英語	4年生	小学校ボランティア、英会話スクールに就職
B	英語	4年生	小学校英語ボランティア、絵本に興味、教職免許取得、児童英語インストラクター
C	英語	4年生	小学校英語ボランティア、卒論テーマが多文化を背景に持つ子供の支援・絵本で言葉の壁を超えるというテーマに共感、子供好き
D	フランス語	4年生	図書館司書課程で図書館での読み聞かせに興味、フランス語暗誦大会
E	イタリア語	4年生	教員免許取得、フリーガイド、英語でなくイタリア語を使う場、イタリアとの交流、小学校に就職
F	ドイツ語	4年生	小学校英語ボランティア、小学校教員免許、子供好き、ドイツ語のヘルプを頼まれた
G	ポルトガル語	修士課程1年	中学校教員免許、ブラジル人生徒との交流、ブラジル人学校でボランティア、専攻語を教える機会、多言語、子供に興味あり
H	中国語	2年生	中国語研究会、中国語弁論大会、ボランティアに興味
I	中国語	2年生	中国語研究会、中国語弁論大会

## 2.2 地域との連携による正課教育としてのコミュニティ・エンゲージメント (Community Engagement) 活動 (河上・梶川)

### 2.2.1 目標と概要

京都外国語大学 (以下、京都外大) では、2018 年創設の国際貢献学部必修コア科目の中核に、Community Engagement (通称 CE) という地域社会での社会活動参加を伴う実践型科目を置いている。本事例では、2019 年度に初めて行われた当該学部グローバル観光学科の国内 CE プログラムのひとつである京丹後 CEP を取り上げ、正課教育として行われた複言語・複文化活動を通じた共同体での学びについて報告する。学生への事前事後アンケートの定量的分析は梶川が、その他の記述は河上が事前授業、実習、現地および学内報告会での参与観察、学生が書いた毎日の活動記録、LINE でのやりとりの記録に基づいて行った。

まず事例内容に入る前に、学科カリキュラムに位置づけられた CE 関連科目について説明する。文科省申請書類によると、京都外大の目指す Community Engagement とは、「国内外の多様な地域社会・社会的活動への参加を通じて、政治的・文化的境界を超えた人間のグローバルな結合の在り方を学ぶ実践的学習」である。学問的な専門知をツールとして、自ら主体的に現地社会の問題を発見し、その解決に積極的に関与することによって、具体的な経験知を獲得することを目指す<sup>2)</sup>。

「Community Engagement Workshop」という 2 単位の事前授業が 1 年次生および 2 年次生の春学期に設定されており、CE の実習 6 単位分 (以下、CEP) はその後、基本 5 週間かけて、2 年次生の夏休み、秋学期あるいは春休みのいずれかに行われる。プログラム内容は、受け入れ地域の提案に基づいて、現地の調整機関や学科担当教員が大学の CE センターと連携しながら、それぞれの地域資源を活用した具体的なプランを作成している。評価方法については、実習の参加・修了を前提としたうえで、成果報告会での発表 (個人あるいはグループ)、レポート提出、日ごとあるいは週ごとの活動報告提出をこなすことが単位習得の条件となる。

### 2.2.2 グローバル観光学科における 2019 年度の実施概要

初回にあたる 2019 年度のグローバル観光学科 CEP については、海外 4 か所 (マレーシア、オーストラリア、グアム、ベトナム) と国内 5 か所 (京都市内、福井県越前町、兵庫県城崎温泉、長野県渋・湯田中温泉、京都府京丹後市) で実施された。行き先によってその内容は異なるが、国内プログラムの場合基本的には、1) 地域での研修、2) 視察および体験企画への参加、そして 3) 自主的調査活動という 3 つの柱から成り立っていた。1) 地域での実習や研修は、旅館やホテル、観光関連会社での就業体験のほか語学研修、農業実習など多岐にわたる。単なるインターンシップの次元にとどまらず、国連の持続可能な開発目標 SDGs の観点から就業体験のなかから産業的課題を発見し、業界関係者へ聞き取りを行ったり、企画を提案したり、積極的に自ら働きかける要素が強調されていた点が特徴的である。2) 視察および体験企画への参加は、現地での観光やレクリエーション活動、また地域の人びととの交流活動などを意味する。最後の

3) 自主的調査活動については、1) と 2) の活動を通して地域と関わるなかで発見した問いをもとに調査し、その結果についての考察とレポート執筆、そして発表の機会を意味する。時期によって3回に渡り、学科単位で行われた学内報告会では、現地での自身の経験を単に報告するのみならず、研修先の企業の組織やシステムの課題に触れる報告や、伝統産業の継承や就労人口の高齢化、ジェンダーといった地域的でありながら普遍的な視野をもった発表も目立った。さらに、CEP 制度そのものの持続可能性について問うものもあった。

### 2.2.3 京丹後の CEP 事例の結果とその示唆

グローバル観光学科の CEP のひとつである京丹後における実習は、2019 年 8 月 4 日（日）～8 月 30 日（金）に京丹後市観光協会が地域コミュニティとの橋渡し役となって実施された。参加者は全員 2 年次生の女子 12 名、男子 3 名の計 15 名である。指導は教養教育所属の教員 1 名とグローバル観光学科所属の筆者とで連携して行った。実習前半は夕日ヶ浦地区を拠点とし、後半は琴引浜地区にて宿泊および活動を行った。特に前半の夕日ヶ浦地区での実習期間は、地区の宿泊施設の夏季繁忙期に相当し、海水浴を目的に京丹後を訪れる国内観光客への対応に追われる地区内の旅館、民宿 4 か所にて、学生たちは就業研修を行った。また、研修以外の活動として、学生たちは地域施設の観光視察や SUP 体験、郷土料理のばらずし作り体験といった体験企画にも参加した。自主調査については、事前の情報収集と各自の関心にもとづいて春学期のうちに、スポーツ・ツーリズム、起業・移住、ホスピタリティ、ペット・ツーリズムという 4 つの調査テーマに絞って班分けを行った。実習時も、調査日や研修や活動が休みの日に、班ごとに調査活動を進めていった。

#### 2.2.3.1 示唆 1) 定性的分析から見た京丹後 CEP が学生の学びに与えた影響

グローバル観光学科のカリキュラムは、言語習得とその背景となる地域や文化理解に重きが置かれる外国語学部とは異なり、観光学の多角的な修得を目指すものである。しかしながら、実習期間中は通常の研修業務以外にも、外大生として、案内板の日本語表示を英語に訳す仕事を任されるなど、京都市や天の橋立で知られる宮津市に比べると外国からの観光客が少ない京丹後でも<sup>3)</sup>、外大生として外国語運用能力を期待される場面があった。

さらに、メールや LINE で送られてくる活動報告や自習期間内に 2 度行なった個人面談からは、大学が位置する同じ京都府内でも、実習中の生活が、日ごろ学生たちが慣れ親しんでいるカフェやファーストフード、公共交通システムから縁遠いものであったこと、またそうした環境下で 1 か月という期間、集団生活を行うなかで生まれる内面的葛藤や人間関係の亀裂に対して、驚きやとまどいを表現する声が聞かれた。また、学生たちが実習前の事前授業で調べたことと、実際に現場で見聞きする状況にギャップを認識し、調査計画を変更せねばならない場面も 4 つの班すべてで見受けられた。つまり、学生たちにとっては、想定内の日常生活から離れた京丹後での暮らしそのものが異文化体験として作用していたとも解釈しうる。さらに、興味深いのはこの異文化

体験やカルチャーショックがネガティブな意味合いに留まらず、ポジティブにも捉えられていたことである。たとえば、実習8日目に当たる8月11日の報告書で、女子学生Aは下記のように記した。

従業員の方たちもお互いに距離感が近く仕事のコミュニケーションが円滑であり、これがお客様への「おもてなし」につながっているのかなと感じた。これが身近に感じることができるとは嬉しいことだ。このCEの活動を通して良かったことは、ホスピタリティの根本の精神的なもの？を感じることができた学ぶことができ、自分自身が観光を学び関わることでできていることに嬉しさを感じる。今回のCEの活動とは関係のない話かもしれないが、観光を学んでいることは将来の自分に直接どのような関係があるのか不安であった。しかし、ホスピタリティを直接感じることができた今回のCEでは異文化理解や異文化交流は難しいものではないと、身近にありみじかに近く異文化をかんじることができるものなのだとわかった。(原文ママ)

学生たちは当初の教員側の予想以上に、地域の方々と関係性を意欲的に構築し、自分たちの調査活動への協力者を見つけて調査活動を進めたり、生活面でも差し入れをもらったり買い出しに車で連れていってもらったりしながら現地の生活に適応し自分たちのミッションを完遂しようとする姿勢が伺えた。地域との関係性という点では、実習後においても、京丹後を自ら訪れたり地域の人がとSNSで繋がったりしている学生が複数いることから一過性ではない関係性が構築された片鱗も伺えた。

#### 2.2.3.2 示唆 2) 定量的分析から見た京丹後 CEP が学生の学びに与えた影響

本取組の前（以下、事前）と、取組終了後（以下、事後）に、質問紙調査を行った。調査項目については、本稿の取組すべてに対して共通項目として設定された全60調査項目（付録「教育実践における大学生の学びに関するアンケート」参照）のうち、問20、問24、問29を、本取組に適合するように改変して実施した。そして、この事前・事後の変化について項目ごとにt検定を行った。結果、ケース数の少なさのため、5%水準の有意差を示す項目は見られなかった。

ただ危険率の範囲10%台以下でみると以下の項目に平均値の差がみられた。「5. 授業を受けている時、気分が良い」「6. 授業で勉強している時、興味を感じる」「18. いろいろな面からものごとが考えられるようになった」「19. コミュニティで活動することで、言葉に対する知識や技能が深まるから」「39. 建設的な提案をすることができる」「51. 目的を設定し確実に行動する力がある」「59. 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力がある」である。

以上、本事例では、正課教育として行われた複言語・複文化活動を通じた共同体での学びとして、京都外大のコミュニティ・エンゲージメント活動を取り上げ、その内容と学生の学びへの影響について、京丹後での活動事例を通して概観した。少ないサンプルゆえに定量的な観点から評

価の判断を下すことは難しい結果に終わったが、少なくとも提出物や学生とのコミュニケーション履歴といった定質的なデータから見る限りにおいては、学生の能動的な学びや成長に一定の効果をもたらしたといえるのではないか。こうした実践活動を経た学生の経年変化を追う調査や、今回扱えなかった共同体へのインパクトに関する調査は今後の課題としたい。

## 2.3 博物館活動を通じたコミュニティ・エンゲージメント活動：プロジェクト名：越前フィールドミュージアム活動（南・梶川）

### 2.3.1 目標と概要：（南）

#### 2.3.1.1 はじめに

京都外大では1988年に学芸員資格課程講座を開設した。そして、1990年に第1期生を送り出して以来、30年にわたる活動を通して1000人を越える資格修了生を送り出している。

2012年からは、国際文化資料館の外部連携活動として、とくに地域社会における博物館の役割について実践的研究を開始し、学芸員資格課程の履修生に参加の機会を設けた。たとえば、中米ニカラグアにおける考古学と博物館を仲介者とする実践的地域研究、京のまちなかまちづくり活動との連携、そして今回の共同研究でとりあげた越前熊谷地区におけるフィールドミュージアム活動がある。

昨年、京都でICOM（国際博物館会議）世界大会が行われ、「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—」をテーマに地域社会の課題解決に向けて大学博物館の役割が世界的にも求められていることが明らかになった。京都外国語大学では国際文化資料館が所属するUMAC（大学博物館とコレクション委員会）のオフサイトミーティングを開催し、資料館から越前フィールドミュージアム活動を報告し、博物館の地域連携活動とそれにかかわる学生教育のありかたに評価を受けた。

このように国際文化資料館は学芸員資格課程と連携し、地域社会の課題解決に向けた「コミュニティ・エンゲージメント活動」を実施してきた。これに加えて2018年に新しく創設された国際貢献学部必修コア科目の中核に、Community Engagement（以降、CE）という地域社会での課題解決に取り組む実践型科目を置いた。そして、その科目の一つとして、グローバル観光学科の学生を越前フィールドミュージアム活動（以降、CEP 越前）として受け入れることになった。

#### 2.3.1.2 研究の背景

CEP 越前活動の中心となる福井県越前町熊谷「地域住民交流センター くまカフェ」は、国際文化資料館が外部連携活動の一つとして、2013年度から熊谷地区およびその周辺の地域活性化活動の拠点として整備してきた古民家である。ここをベースとして、学芸員資格課程の履修生を中心に継続的な活動を実施している。これはNPO法人フィールドミュージアム研究所（代表：南博史、以降、IFMAの表記）が、地域住民ならびに地方自治体などの諸団体がフラットに連携して地域の課題解決にあたる「越前フィールドミュージアム構想」の一環である。



この「フィールドミュージアム構想」では、地域を博物館と見立て、地域のさまざまな資産を発見し、あらたな価値を博物館的な方法で普及啓発することで地域活性化につなげていく、住民主体の持続的活動の仕組み、体制、方法を提言している。これにはアクターとよばれる主体となる住民、地方自治体、企業や個人団体のほか、外部からは大学や専門家（NPO など）が参加する。これを持続させていくためには、地域住民が主体になることと「地域と外部をつなげる仲介者」としての役割と活動が必要になる。

越前フィールドミュージアムでは、IFMA のほかに京都外国語大学がその中心的役割を担ってきたが、2019 年度からはフィールドミュージアム活動を通して整備が進んだ古熊谷水田周辺の里山（水田ビオトープ、越前焼窯跡など）、くまカフェ周辺の資産（くまだん畑、炭焼など）をさらに活用し、関係人口の増加に向けたあらたな計画を開始した。また、県と越前町の支援で整備されたくまカフェでは、定期的なカフェ営業も開始し、住民交流センターとしての活動も始まった。カフェの利用客に加えて、講演会や音楽会などの利用によって、現在年間約 2000 人が熊谷およびその周辺を訪れるようになっている。

### 2.3.2 グローバル観光学科における 2019 年度の CEP 越前実施概要（南）

今回の CEP 越前では、国際文化資料館外部連携活動に準じて、2 年生の秋学期に毎月 1 回 3～5 日活動を継続的に実施した。活動内容は、①社会奉仕活動、年中行事への参加、②獣害問題、少子高齢化問題など CEP を通して自らが課題を発見し調査、③調査成果の住民への報告である。

この条件のもとで実施した正課科目としての CE が、学生教育にどのような効果が見られるかを統計的手法と、学生の活動や生活状態を観察した定性的分析から明らかにする。

#### 2.3.2.1 実施方法

##### ① CEW2 事前学習およびフィールドワーク

- ・農業問題、越前での無農薬米作りへの取り組みなど講義（越前若手農業士井上高宏氏）
- ・古熊谷水田での無農薬田植えイベントに参加（6 月）
- ・公共政策ゼミなどの夏合宿、社会奉仕活動に従事（8 月自由参加）

##### ② 9 月／フィールドワーク

- ・越前町地域創生室での聞き取り調査。稲刈作業など

##### ③ 10 月／地区祭り参加、社会奉仕活動

##### ④ 11 月／個別調査の実施

- ・JTB 福井支店聞き取り調査、越前町商工観光課、観光協会聞き取り調査、福井市ジビエ活動団体での現地調査、空き家現状調査、コミュニティバスの体験調査など

##### ⑤ 12 月／調査成果のとりまとめ、追加調査など

##### ⑥ 1 月／調査成果の報告

- ・西三区左義長の後のふるまいの場を利用し、ポスターと一人 10 分で成果を発表。住民か



ら評価を受ける。

### 2.3.2.2 参加者

グローバル観光学科女子7名、男子1名

## 2.3.3 博物館活動を通じたコミュニティ・エンゲージメント活動の結果と示唆（南・梶川）

### 2.3.3.1 定量的分析（梶川）

#### 2.3.3.1.1 結果

本取組の前（以下、事前）と、取組終了後（以下、事後）に、同一の質問紙による調査を行った。この調査項目は本論文中の取り組みすべてに対して共通項目として設定されたものである（質問紙は巻末に掲載）。これら60項目について事前、事後間のt検定をおこなった。その結果、5%水準で有意差が見られたのは2項目であった（「問21 コミュニティで活動しないと充実感がないから」「問31 何か複雑な問題を考えると混乱してしまう」）。2項目とも「あてはまらない」側への変化であった。

なおケース数が少ないため参考として危険率10%台まで拡げてみると5項目が該当した（「問2 私は集中して授業を受けている」「問11 学校で教えられたことを理解することができると思う」「問16 新しいことを知りたいという気持ちがあるから」「問22 知識や技能を使う喜びを味わいたいから」「問50 他人に働きかけ巻き込む力がある」）。51項目のうち「あてはまる」側への変化は問2、問11、問22、「あてはまらない」側への変化は問16、問50であった。

#### 2.3.3.1.2 解釈

5%水準で有意差の見られた2項目のうち「問31 何か複雑な問題を考えると混乱してしまう」が「あてはまらない」側へ変化したこと、すなわち混乱しなくなったということは、実際に活動することで、予期できない課題が生じること、それを対処していったことがこの結果に繋がっていると考えられる。なお「問21 コミュニティで活動しないと充実感がないから」が「あてはまらない」側へ変化したことは、一見、否定的な結果と見えるが、事前には「実践」と「座学」は別のもので座学にはあまり価値を見出していなかった学生が座学の必要性を認識した結果であるとも解釈できる。

それを傍証するのが10%台の「問2 私は集中して授業を受けている」「問11 学校で教えられたことを理解することができると思う」「問22 知識や技能を使う喜びを味わいたいから」が「あてはまる」側に変化していることである。なお「問16 新しいことを知りたいという気持ちがあるから」が「あてはまらない」側に変化していることは、事前にはこの活動で新奇な物事に出会いたいことが動機であったが、事後には新規性よりも地域の課題に取り組む必要と、そのためには前提となる知識技能が必要であるとの認識がこの結果をもたらしたと考えることができる。

また「問50 他人に働きかけ巻き込む力がある」が「あてはまらない」側に変化したことは同

世代の中だけのリーダーシップが通用しないことを活動の中で知った結果であり、学生の人間的成長の証拠であると考えられる。

### 2.3.3.2 定性的分析（南）

#### 2.3.3.2.1 分析結果と解釈

参加した学生の記述式アンケートから、「共同体」から何らかの刺激、学びを受けたと思われる箇所を抜き出した上で、学生の活動を継続的に観察してきたことを踏まえ、定量的分析を踏まえた評価を加える。

- ・自然豊かな田舎生活をおくれたこと→自然とのかかわり方について十分には理解できていない。
- ・住民の方と直接コミュニケーションが取れること→実際は消極的にみえた。機会があってもアプローチの方法がわからなかったのではないか。
- ・仲間と協力して問題を見つけたりすること→リーダーシップを発揮して説得力あるいは魅力ある解決案が提示できなかった。
- ・教室を離れ継続的に活動できたこと→イベント的なキャンプや合宿と異なり、田舎に暮らすことの難しさにとまどっている様子が見受けられた。個々リーダーシップを発揮できる能力があるが、不思議なくらいに顔を見合わせている様子が見られた。これらは定量的分析からの解釈と整合する。

一方、「社会奉仕活動を通して地域の方と近い距離間でお話しすることができた」は、奉仕活動を通して地域住民から感謝され、やりがいを感じている様子が見受けられたこと。限界集落である熊谷地区の問題を理解し、その解決に役立てたことに満足感をもったことにつながっていると思われる。

また、「越前町ならではの陶芸を行ったり、越前ガニを食べてみたかった」など、越前の生活文化に興味を持ち、事前の知識の学習や技術の習得の大切さに結び付いていると考える。

#### 2.3.3.2.2 まとめ

ここから受ける本研究への示唆としては以下をあげてまとめとしたい。

- ①「複言語・複文化活動を通した共同体での学び」の場としてのフィールドを通して、学生が複言語を学習することのきっかけにするためには、地域に寄り添い、地域の資産とニーズを掘り起こし、地域の生活・文化に関わる課題を地域住民と交流しながら発見し、解決していく能力が必要である。
- ②自律性、協働的成長、市民性や専門性の育成を目標とする学習として教室と共同体を結び付けることで、学生の協働、または地域との協働を通した学びが、学生を成長させることが立証できた。
- ③一方、フィールドワークから得られる経験知と知識・技術の習得を目指す学習を継続的連続

的、好循環的に計画・実施し、分析・評価していく方法の開発が必要。

最後に CE 活動を受け入れた地域がどのような影響を受けたかについては、調査分析できなかった。報告会では地元に着した活動への評価が高かったことを報告し、今後別の機会を設けたい。

## 2.4 文系大学におけるサイエンス・コミュニケーション（畑田）

### 2.4.1 概要と目標

「サイエンス・コミュニケーション」（以下 SC と表記）は、2016 年のカリキュラム改訂時に開設された PBL 科目である。この科目を提案したのは著者である。著者は日頃から京都外国語大学に所属する学生たちのコミュニケーションの高さに注目していた。残念ながら、彼らが「サイエンス」に興味を持つことは少ないのだが、彼らの強みであるコミュニケーション能力があれば、サイエンスの視点を後付けすることでサイエンス・コミュニケーターになれるのではないかと考えた。

そこで、著者はサイエンスのバックグラウンドを持たない学生たちに、SC の経験を積んでもらうことに挑んだ。授業は、クリティカル・シンキングの練習、身近なテーマを用いてクラス内で SC を実践する、広い対象にプロジェクトを実施する、の 3 つの内容で構成した。本稿ではこの授業の集大成であるプロジェクトの内容、授業ガイダンス（事前）と、プロジェクト終了後（事後）に行った「教育実践における大学生の学びに関するアンケート」の結果について報告する。

### 2.4.2 プロジェクトの実施

プロジェクトは外大の近隣にある Y 児童館で行なった。事前に児童館を下見し、会場の狭さと子どもたちのパワーを知ってもらってから、プロジェクトの内容を練り、「やってみよう！紙飛行機対決」と題したプロジェクトを行うことにした。折り方や紙の種類によって飛距離が違うことを子どもたちでも実感してもらえるように、紙は折り紙、新聞紙、ハツ折画用紙、A4 サイズの OA 用紙を準備し、最後に渡すプレゼントは、飛距離でギネス記録を捕ったのと同じ折り方で作った紙飛行機を用意した。

プロジェクトは 2019 年 7 月 28 日に行った。参加した学生は 10 名、児童は事前募集した 12 名が参加した。最初は子どもたちとの関わり方がわからなかった学生もいたが、普段大学生と関わる機会のない子どもたちは大喜びで、子どもたちから関わってくれ、終始歓声の絶えないプロジェクトとなった。

### 2.4.3 「教育実践における大学生の学びに関するアンケート」の実施

アンケート項目は、SC の特性に合わせて、項目 19, 21, 23 の文言を一部改変したが、質問の

意図は変わらない。事前・事後でt検定にかけたところ、60項目中43項目で有意差が見られ、すべてで事前から事後で評価が肯定側に移っていた。これは、「子ども」という、感情が表情に出やすい対象が喜んでいる姿を見ることにより、自分たちのプロジェクトが成功裏に終わったことがわかり、自己肯定感が高まったことの表れではないかと考える。

#### 2.4.4 文系学生の「サイエンス・コミュニケーター」としての可能性

外大生は、専門的な知識が不足している分、コミュニケーション力は長けている。問題は「科学的知識の欠落」ではなく「科学に対する苦手意識」である。科学はなにも方程式や難解な化学式ばかりではない。紙飛行機の飛距離もまた、立派な科学である。そのことを認識し、相手に「伝える」というSCを経験する場として、プロジェクトは適切な場の一つであった。今後の彼らの活躍に期待したい。

### 2.5 プロジェクト 大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー（島村・南）

#### 2.5.1 概要と目標

##### 2.5.1.1 研究の背景

本スタディツアーを実施した福井県越前町熊谷「地域住民交流センター くまカフェ」は、京都外国語大学国際文化資料館が外部連携活動の一つとして、2013年度から熊谷地区およびその周辺の地域活性化活動の拠点として整備してきた古民家である。ここを拠点として、学芸員資格課程の履修生を中心に継続的な活動を実施している。これはNPO法人フィールドミュージアム研究所（代表：南博史、以降、IFMAの表記）が、地域住民ならびに地方自治体などの諸団体がフラットに連携して地域の課題解決にあたる「越前フィールドミュージアム構想」の一環である。

この「フィールドミュージアム構想」では、地域を博物館と見立て、地域のさまざまな資産を発見し、あらたな価値を博物館的な方法で普及啓発することで地域活性化につなげていく、住民主体の持続的活動の仕組み、体制、方法を提言している。越前フィールドミュージアムでは、IFMAのほかに京都外国語大学が地域住民に寄り添いながら、「地域と外部をつなげる仲介者」としての役割を担っている。具体的には、活動拠点として熊谷区の古民家を「くまカフェ」として整備、博物館学芸員資格課程の履修生が定期的に通って、フィールドミュージアム活動のきっかけとなった古熊谷地区（熊谷住民が稲作を行ってきた山間地）での無農薬のコメ作りを目指す若手農業士への支援、過疎が進む熊谷区の年中行事、社会奉仕活動への参加、自然環境保全活動、環境整備活動などを行っている<sup>4)</sup>。

そして、2019年度からはフィールドミュージアム活動を通して整備が進んだ古熊谷水田周辺の里山、くまカフェをさらに活用し、関係人口の増加に向けたあらたな計画を開始した。また、県と越前町の支援で整備されたくまカフェでは、定期的なカフェ営業も開始し、住民交流センターとしての活動も始まった。カフェの利用客に加えて、講演会や音楽会などの利用によって、現在年間約2000人が熊谷およびその周辺を訪れるようになっている。

国際文化資料館および学芸員資格課程の外部連携活動としても、新しい計画を踏まえて熊谷周辺のフィールドミュージアムを利用したあらたな活動を模索していたところ、今回の本学学生と地元足羽高校が連携する語学スタディツアーを実施することになった。これは2017年8月にくまカフェを利用して行った同志社大学文化情報学科の特論のフィールドワークに参加した中国人院生と足羽高校の学生が交流する機会があり、熊谷のフィールドを利用したアクティブラーニングによる語学学習が可能ではないかということがきっかけになった。また、くまカフェに外部から外国人を含めた多様な若者が集まることで、地域にあらたな刺激を与える可能性も調査できると考えた。

#### 2.5.1.2 プロジェクトの概要

本スタディツアーは、2019年8月5日から7日（2泊3日）の日程で実施された。スタディツアーの参加者は、本学で中国語を専攻する大学生3名（2年次生2名、3年次生1名）、日本語を専攻する留学生3名（1年次生）、足羽高校で正課として中国語を学ぶ高校生6名の計12名である。そのほかに、大学の教員が2名、高校の教員が1名指導にあたった。以下では、主に大学側の取り組みを紹介する。

スタディツアーにおける主な活動は、①個人発表、②異文化理解についてのグループ発表、③地域での貢献作業（水田での雑草除去・薪割り）である。①と②については、参加学生が学んでいる目標言語で行うこと、パワーポイントを用いることを条件とした。ツアー初日に個人発表を行い、2日目の午前に地域での貢献作業を行った。3日目はスタディツアーの成果として、グループ発表を行った。その他の時間は、グループ発表に向けた準備作業（グループ学習）にあてた。スタディツアーに先駆け、事前学習を2日に分けて計6時間行った。事前学習では、主に1. 個人発表のリハーサルと改善点についての話し合い、2. グループ発表のテーマについての調査・報告・全体共有、3. 「論理的な表現」についての学習を行った。

上記の活動を行うにあたり、1）外国語でのコミュニケーション能力の向上、2）異文化理解力の育成（異なる文化的背景をもつ学生の交流を通して、文化や社会の多様性を認識する）、3）社会人基礎力<sup>5)</sup>の育成を目標とした。次に、①と②の発表活動を紹介する。

### 2.5.2 実践

#### 2.5.2.1 個人発表

個人発表について、大学生・留学生は、パワーポイント（以下、PPT）を用いて、大学生活や出身地等を紹介するプレゼンテーション（以下、プレゼン）を行った。PPTと原稿は事前に提出させ、教員が日本語・中国語を添削し、個別に修正案を提示した。事前学習では、修正後のPPTを用いて全員がリハーサルを行い、改善点を話し合った。

### 2.5.2.2 異文化理解についてのグループ発表

グループ発表では、大学生・留学生・高校生によるグループを3つ作り、各グループに異なるテーマ（1. 日本と中国の流行語について、2. 日本と中国の人気アプリについて、3. 日本と中国の習慣の違いについて）を振り分けた。各テーマについて、個人で下調べをした後、2回目の事前学習で調査結果を全体共有した。調査結果をポストイットに書き出し、カテゴリーの近いものでグルーピングし、プレゼンの流れを全員で考えた。その後、各自が興味をもった事象を選び、説明文を考えた後、目標言語に翻訳する練習を協同学習の手法で行った。

ツアー初日に教員がプレゼンの概要を説明し、グループ発表の評価に用いるループリックを学生に提示し、求められるプレゼンの基準を示した。プレゼンは、メンバー全員が分担して発表することを条件としたが、日本語と中国語の使用場面や配分については、学生の裁量に任せた。本番では、上述のループリックを用い、教員・学生・OBによる評価を行い、教員とOB<sup>6)</sup>が講評を行った。

### 2.5.3 振り返りアンケートと示唆

#### 2.5.3.1 スタディツアーの振り返りアンケートから

スタディツアーの最終日に全13項目からなるアンケートを行った。紙幅の都合上、ここでは特に「事前学習・スタディツアーを通して、効果があったと思う項目」と、「効果があまりなかったと思う項目」<sup>7)</sup>についての学生のコメントを紹介したい。

まず、「効果があったと思う項目」では、「人間関係」や「多文化共生力」を選んだ学生が多かった。以下はその理由を述べたコメントである。

- ・国、年齢、性別関係なく楽しく過ごせたから。自分の意見を出しつつ、あまり意見を言い出せない子に話を振って、皆の意見を発表に反映できたと思うから。(大学生)
- ・テーマが、日中間の習慣の違いだったので、日本にない習慣を理解し、受け入れることができたと思う。また、中国語での交流もあり、中国語力も向上した。そして、年齢も離れていたの、人間関係のコミュニケーション力も身についた。(高校生)

次に、「効果があまりなかったと思う項目」については、「課題発見力」と「協働力」について言及したものがあつた。

- ・こん回のテーマは決まて（筆者注：決まって）いるので、課題表現力がちょっと足りないと思います。次回はおおまかなテーマで自分でタイトルを作るほうがよいと思います。(留学生)
- ・「自分がやらなきゃいけない」と思い過ぎていたので、もう少し高校生たちにも意見を聞けば良かったなと思った。(大学生)

「課題発見力」については、大枠のテーマを提示し、その範囲内での具体的なテーマ設定は学生に任せるといった対策が考えられる。「協働力」に関しては、事前学習において、協同学習の概要と見込まれる学習効果を説明する。グループ学習の際、メンバー一人ひとりに課題を振り分けるべく教育的介入を行う等の改善が必要であると考ええる。



### 2.5.3.2 地域住民からみた本活動への示唆

今回のスタディツアーにおける活動のうち、フィールドに直接関係するものは、③地域での貢献作業である。③では参加学生が2つのグループに分かれ、水田での雑草除去と薪割りを行った。

「地域と外部をつなげる仲介者」としてこの活動を振り返ると、語学教育との関係を明確にする目標と計画が作れず、結果としてフィールドワークを通じた語学教育の効果についての調査が実施できなかった。学生諸君にとっては、水田での雑草除去と薪割りをを行う意味が理解されず、気分転換くらいにとらえられていたのではないかと推測する。

地域住民にとっても、直接的、間接的に関係する機会がなかった。これは準備段階において、語学教育と地域貢献の具体的な活動が明確にできなかったこと、学生諸君にフィールドミュージアムについて十分に飲み込んでもらう説明ができなかったことにある。

また、アクティブラーニング型の語学教育と地域活性化を結ぶ有効な理論・方法を見つけられなかったことも、「地域と外部をつなげる仲介者」の課題である。次回は、こうした結果と反省を踏まえたうえで地域住民の方々と一緒にあらたな若者を迎えたい。

## 2.6 小学校英語ボランティアプロジェクト（吉田）

### 2.6.1 プロジェクトの目的

本プログラムは、教員志望の学生が実際の指導現場で技術や知識を試行するために2009年より開始された英語活動指導ボランティア活動である。Kolb（1984）が主張するように、対象言語の言語システムや教授法の知識を得るだけではなく、実践者としての自らの経験を分析する研究手法を身に着けることが実践指導力を高める効果的な方法であると考え、授業実践後の振り返りを込みこんだ。

### 2.6.2 プロジェクトの概要

実施校は主に京都市立小学校2校であり、土曜日に設けられている土曜学習という地域住民のボランティアによる教育補助活動の一環として、本学の学生による英語活動指導ボランティアグループが招かれている。ほぼ毎月1回のペースで、土曜日の10:00～11:00の時間帯に60分間の英語活動を年間8回実施している。対象は1年間の参加希望の申込みがあった3年から6年生の児童で構成された約20～30名のクラスである。毎回ほぼ固定した8～10名の学生メンバーで構成するチームで英語活動の準備及び指導をしている。登録している学生の多くが教職志望者である。定例の活動に加え、近隣の小学校や大学祭などでも英語活動を単発に開催している。一回の英語活動を実施するにあたり、初回のテーマや活動メンバーの決定のためのミーティングから、指導案や教材・教具の作成、及び実技の練習等で、約1カ月（約20時間～30時間）をかけて準備する。テーマと主な活動内容は、参加学生が主体的に決定し、指導案の作成や教具の作成も含め、基本的には学生主体で準備を進める。活動毎に担当者を複数決定し、担当するパートの指導案を作成し練習を行う。教員も助言を与えるが、基本的には学生間で実技の向上を目指して問題

を指摘しあいながら準備を進める。活動直後に反省会を開き、活動準備や本番に関する反省点やコメントを学生が中心に指摘し合い、最後に実施校の関係者からもコメントをもらう。後日ビデオで振り返りの会を行い、主に指導教員2名が活動のデザインや実践技術についての講評を与える。教職志望の学生の教授技能や職業意識の変容において活動が大きな影響を与えたことが観察されたが（吉田・相川 2015, 2020）、今回の調査は教職志望ではない学生にとっての活動の有用性を明らかにしたい。

## 2.6.3 調査

### 2.6.3.1 データ収集方法

3名の協力者に対して、活動終了時に半構造化面接を実施した。本調査の対象者は、本プロジェクトに参加したメンバー4年次生3名である（表3参照）。3名とも役立つ経験を積みたいという理由で参加しており、データ収集期間中はほぼ毎回継続して参加し、中心メンバーであることから面接の対象として選抜された。プロフィールは以下の通りである。

表3：研究協力者のプロフィール

	学生 A	学生 B	学生 C
ボランティア歴	2年	4年	3年
その他の活動	リーダーシッププログラム	イベントボランティア	国際交流サークル
進路	児童英語インストラクター	英会話講師	国際会議運営会社

面接は趣旨説明や合意書等の書類への記入時間を除いて、一人あたり30～40分程度であった。事前に対象者の許可を取った上で会話は全て録音された。以下のインタビューガイドラインを用いて実施したが、そこから発展した補足的質問も行った：活動参加（継続）理由・活動による自分の変化、自分の大学生活、教育観、メンバー（先輩、同期、後輩）から学んだこと、成功した活動とその理由、活動を良くするための提案。

### 2.6.3.2 結果と示唆

文字化したインタビューデータを、切片化し、コーディングを行ったところ、17のコードが確認された。それらのコードは、『体験から得られたこと』『活動で大事にしたいこと』『メンバーについて』という3種類のカテゴリーに分けられた。『体験からの得られたこと』のコードが最も多く10コードが含まれた：「子供との接し方」、「英語力向上」、「プレゼンテーション力」、「後輩の育成」、「チャレンジ力の向上」、「皆で作る喜び」、「社会への責任を持つ体験」、「英会話講師への動機づけ」、「人と関わる仕事への方向付け」、「イベント遂行力」。

研究協力者の3名とも活動に参加した動機が、幼少期に英語を学んだ経験があることや、子供好きであること等であった。学生BとCは活動からの学びとして、「主体的に参加できる活動」

であることや、「リーダーシッププログラムで学んだことを実践的に体験して学べる場」であることなどを挙げていた。3人に共通しているのは全員子供との接し方が向上したことを挙げている他、「皆でものを作り上げていく楽しさ」や「イベント遂行力」「新しいことへのチャレンジ精神」、「社会に対して責任を持つ体験」等、英語の指導に特化した学びではなく社会人として今後活用できる汎用性のある能力を身に付けられると感じていることである。また「リーダーの存在とサポートする立場の存在の重要性」や「仲間どうしのサポート」等の指摘からは、協働作業における重要な要素を学んでいることが分かる。また「後輩の育成」や「先輩からのサポート」や「後輩との意見の相違」など共同体の運営において直面する問題に対しても気づきを得ていることが分かった。最後にこの活動に参加した体験が、「英会話講師への動機づけ」、「人と関わる仕事への方向付け」、等教職以外のキャリアへの方向付けにも貢献していることが分かった。

### 3. 考察

前章で紹介した事例は、外国語系・国際系学部が参加した、地域との連携による協働活動をともなう様々なタイプの教育プログラムの概要とその教育効果であった。本節では、1.3節で示した3つの視点（①外国語専攻の学生が専攻語を用いて行う正課外の協働プロジェクトの可能性②正課のプロジェクトとしての課題と有効性③教養科目としてのプロジェクト型の学びの可能性と有効性）から教育上の有効性及び今後の課題を考察する。

「図書館での多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト」（2.1節）や「大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー（島村、南）」（2.5節）、及び「小学校英語ボランティアプロジェクト」（2.6節）では、定量的アンケートやインタビューという質的及び量的方法論を用いて学びの効果を評価したところ、これまで自分のために学ぶ対象であった「外国語」が実践を共有する誰か（＝他者）に何かを伝えるためになったことで、専攻する外国語を用いて社会につながることを意識し、専攻語の学習動機を高める可能性が示された。また専攻語への学習意欲だけでなく、多文化共生の重要性への理解が深まり、協働作業を行うのに必要な社会人基礎力の向上、およびキャリア形成にまで影響を及ぼす可能性があることも明らかにされた。一方で共同体（実践を行うフィールドの提供先）の構築や、事前指導や教員の介入方法など、正課外だからこそその難しさも明らかになった。ルーブリックの構築や振り返りのツールの開発などを用いてまた語学力への効果の学生への可視化の方法や、図書館、小学校、地域といった共同体にも与えたインパクトも体系的に評価する尺度の開発が今後の検討課題となる。

正課のプロジェクトとしての課題と可能性については、「地域との連携による正課教育としてのコミュニティ・エンゲージメント活動」（2.2節）と「博物館活動を通じたコミュニティ・エンゲージメント活動：越前フィールドミュージアム活動」（2.3節）では、国際貢献学部での必修科目であるコミュニティ・エンゲージメントとしての活動とその学習効果について報告された。事前事後のアンケート結果に基づく定量的分析からは、様々な社会人基礎力の発達に加え、地域の

課題に取り組むという実践を通して、教室内で身に付ける知識技能の必要性への認識をもたらしたことが示された。またインタビューやレポート提出物、活動記録などから観察する定性的な分析からは、事前授業で学んだことと、実践現場で起こる想定外の展開との間のギャップを認識する機会となり、直面した想定外の異文化体験が、異文化理解につながっていることがうかがえる。多様な地域社会でのコミュニティとの間で構築した関係性からも積極的に経験値を獲得していた。今後は学生の能動的な学びや成長を経年的に観察するための尺度や、共同体へのインパクトをどのように評価するかという指標を開発していくという課題が明らかになった。

最後に、教養科目としての、地域コミュニティとの連携による協働学習プログラムの可能性として、「文系大学におけるサイエンスコミュニケーション」(2.4 節)では活動内容とその教育効果が示された。外国語専攻の学生にとって、決して得意ではない、むしろ苦手意識の高い分野(例：科学)でも、社会や児童に伝えるという「コミュニケーター」としての自己効力感が高まり、その結果専攻語をはじめとした大学での学びや、その他社会人基礎力や、多文化理解の意識などを高める可能性を示せたことは、今後の教養教育において、有効性の高い PBL 型の学習を構築する際、参考にできるのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、外国語系または国際系の専攻の学生が、各言語および関連の学問的専門分野において、語学能力の向上や専門知の修得のみならず、自律的・協働的成長を目指した相互文化的市民性の形成や国際的専門性を育成することを目指した共同体との連携活動の実践を報告し、それらのもたらす教育効果について考察した。

こうした試みは今広がりつつある CEFR が提唱するような単一言語・文化を規範とする教育を超えた、複言語を組み合わせて学びあう能力の育成のための多文化体験学習活動であり、高等教育機関におけるグローバル人材育成教育の流れとも一致する(坂本、堀江、米澤, 2017; 村田, 2018)。絵本読み聞かせプロジェクトや CEP, 小学校英語ボランティアでは、学生の有する複言語・複文化的リソースが地域社会からのニーズに合致し、地域社会で活かされたことが報告されたように、単言語及び外国語教育に特化するのではなく、複数の言語を扱う複言語・複文化主義に基づいた包括的な言語体験により、大学生だけでなく、多言語化の進む地域社会にも意義のある活動となる。

多様性を教育的資源として、立場の異なった背景を持つメンバーから帰納的・探究的に学び、社会参加及び貢献に繋げられる場を学生に提供するには、関連機関との連携から構成される活動共同体に、学生が参加体験的に関わるのが求められる。地域コミュニティや関係者と連携することで、学生が地域コミュニティにとって解決すべき課題が何かを具体的に考える機会を経験することができるという意味で、武田(2015-a, b)が提唱する参加型アクションリサーチ(CBPR)の枠組みを用いて教育プログラムを考案することは、大きな学習成果を生む可能性を

高めると考えられる。実践の報告でみられたように、活動参加によって、自己の適性を判断し、外国語や専門領域を学ぶモチベーションに繋げたり、キャリアと結びつける可能性が期待できるからである。さらに、今後の課題として、長期的な観点から活動の効果を、大学側だけでなく、連携先のコミュニティや組織にも共有できるような形で検証していくことも必要である。そのためには、参加学生が体験を評価し、言語化及び可視化する場の構築と継続が重要になってくるだろう。

## 注

- 1) 国内・海外の図書を通じた多文化紹介活動については『多文化に出会うブックガイド』（世界につながる子どもの本棚プロジェクト編，2011），『多文化絵本を楽しむ』（福岡貞子他編，2014）を参照した。
- 2) 京都外大において必修科目として学外で宿泊をとまう実習を位置づける試みは，2010 年創設の外国語学部国際教養学科において行なわれてきた海外での約 10 日から 2 週間の「オフキャンパス・プログラム」に続くものである。
- 3) 『平成 30 年（2018）京都府観光入込客調査報告書』によると，平成 30 年に外国人宿泊客の数は，京都市が 4,503,369 名，宮津市が 41,792 名，京丹後市が 4,420 名であり，京丹後市は京都市の約 1000 分の 1，宮津市の約 10 分の 1 の割合であった。
- 4) 熊谷区では，中山間地域等直接支払制度による事業の中に越前フィールドミュージアム構想にとまう京都外国語大学との協働プログラムを組みこんでいる。
- 5) 「社会人基礎力」（経済産業省 URL: <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>）を参照。
- 6) 京都外国語大学校友会福井支部会総会（2019 年 8 月 4 日）を通じて，スタディツアーの実施を知った OB の方が，急きょプレゼンの評価・講評に加わってくださった。
- 7) この 2 つの設問に対しては，「課題発見力，理解力，知識・手法，主体性，働きかけ力，実行力，発信力，傾聴力・柔軟性，人間関係，多文化共生力，中国語／日本語の表現力の向上，中国語／日本語でのコミュニケーション能力の向上，中国語／日本語でのコミュニケーションへの興味」といった選択肢を設けた。

## 参考文献

- 石崎貴士（2015）「グローバル化を目指す日本の英語教育と CAN DO リスト：複言語・複文化主義からの考察」『山形大学大学院教育実践研究科年報』第 7 号，p24-30.
- 岩城泰子，吉村雅仁（2013）「小学校と大学との協働による国際理解教育としての外国語活動」『教育実践開発研究センター研究紀要』第 13 号，p37-43.
- 梅本貴豊，伊藤崇達，田中健史朗（2016）「調整方略，感情的および行動的エンゲージメント，学業成果の関連」『心理学研究』，87(4)：p334-342.
- 久保信子（1997）「大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討」『教育心理学研究』45(4)，p449-455.
- Kolb, D.A.(1984). *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 坂本利子，堀江未来，米澤由香子（編）（2017）『多文化間共修』学分社



- 世界につながる子どもの本棚プロジェクト（編）（2011）『多文化に出会うブックガイド』読書工房
- 武田丈（2015-a）『参加型アクションリサーチ（CBPR）の理論と実践』世界思想社
- 武田丈（2015-b）「コミュニティを基盤とした参加型リサーチの展望」『人間福祉学研究』第8巻(1), p9-25.
- 中西良文（2004）「成功／失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響」『教育心理学研究』52(2): p127-138
- 沼田潤（2010）「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査：異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究」『評論・社会科学』91, p169-188
- 福岡貞子, 伊東正子, 池川正志, 伊丹弥生（編）（2014）『多文化絵本を楽しむ』ミネルヴァ書房
- Pintrich, P. R., & De Groot, E. V.(1990) “Motivational and Self-Regulated Learning Components of Classroom Academic Performance”, *Journal of Educational Psychology*, 82, p33-4
- Macknish, C., Tomaš, Z. & Vojtkuláková, M. (2018) Examining Performance and Attitudes of TESOL Preservice Teachers and their English Learners in a Service-Learning Project 3-22 *Reading Matrix* Vol.18-2
- 村田晶子（編）（2018）『大学における多文化体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版
- 吉田真美, 相川真佐夫（2015）「教職志望の学生による小学校英語ボランティア活動における振り返り活動：振り返り活動のシステム開発とその効果」, 『京都外国語大学研究論叢』, 第85号 p59-76.
- 吉田 真美, 相川真佐夫（2020）「指導体験が及ぼす教職志望学生のアイデンティティの変化」*JALT journal : journal of the Japan Association of Language Teachers* 43(1)（印刷中）

2017年度よりJSPS科研費「複言語・複文化活動を通じた学びの共同体の構築と有効性（課題番号17K02907）」の助成を受けて、外国語系学部と地域の共同体を構築し、協働による様々な活動プロジェクトの体制作り及びプロジェクト活動を実施した。本研究はその成果によるものである。



教育実践における大学生の学びに関するアンケート

私たちは、教育実践における大学生の学びに関する研究をしています。本調査については、統計的な処理を行い、個人が特定される状態で結果を公開することはありません。ご協力よろしくお願いたします

研究調査者：村上正行（大阪大学全学教育推進機構）、吉田真美（京都外国語大学）  
問い合わせ先：masayuki@muraakami-lab.org

京都外国語大学（外国語・国際貢献）学部

学科

学籍番号

氏名

小学校教育ランティアへの参加回数（ ）年（ ）か月、活動への参加回数（ ）回

各項目について、現在の自分の考えに最も近いものに○を記入して下さい。

全く同意しない	多少同意しない	どちらでもない	多少同意する	全く同意する
---------	---------	---------	--------	--------

1	私は学校で頑張っている。				
2	私は集中して授業を受けている。				
3	私はできるだけ頑張って学校の課題に取り組んでいる。				
4	授業中は、先生の話を注意深く聞いている。				
5	授業を受けているとき、気分が良い。				
6	授業で勉強しているとき、興味を覚える。				
7	授業は楽しい。				
8	授業で勉強しているとき、熱中している。				
9	授業で何か新しいことを学ぶのは楽しい。				

10	その気になれば、勉強はよくできると思う				
11	学校で教えたことを、理解することができると思う				
12	授業で出された問題や課題をこなすことができると思う				
13	良い成績をとることができると思う				
14	うまくいったり方々で勉強していると思う				
15	これから先、授業で教えられることを、理解することができると思う				

外国語の学習の動機として、次の項目で書かれたものは、自分にどれだけあてはまりますか？

16	新しいことを知りたいという気持ちから				
17	すぐに役に立たないとしても、外国語自体おもしろいから				
18	いろいろな面からものがとが考えられるようになるため				
19	外国語を勉強することで、言葉に対する知識や技能が深まるから				
20	他の国のの人たちと知り合いになれるから				
21	外国語を勉強しないと充実に感じないから				
22	知識や技能を使う喜びを味わいたいから				
23	外国語を勉強しないと、いろいろな面からものが考えられなから				
24	学校などで友人や知り合いが得意だから				
25	現在の生活の場面で役に立つから				
26	今まで以上に身につけた外国語の知識や技能を失いたくないから				

各項目について、現在の自分の考えに最も近いものに○を記入して下さい。

全く同意しない	多少同意しない	どちらでもない	多少同意する	全く同意する
---------	---------	---------	--------	--------

27	複雑な問題について側面立てで考えることが得意だ				
28	考えることがまとめることが得意だ				
29	物事を性格に考えることに自信がある				
30	誰もが納得できるような説明をすることができる				
31	何か複雑な問題を考えると混乱してしまう				
32	公平な見方をするので、私は仲間から判断を任される				
33	何かの問題に取り組む時は、しっかりと集中することができる				
34	一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組みつづけることができる				
35	道筋を立てて物事を考える				
36	私の欠点は気が散りやすいことだ				
37	物事を考えるとき、他の案について考える余裕がない				
38	注釈深く物事を調べるができる				
39	建設的な提案をすることができる				

40	いろいろなものの方からものごとを捉えようとする				
41	多様な考え方を皆採りし、自由な発想を大事にする				
42	従来からある社会の考え方にとらわれない、新しい考え方に挑戦する				
43	深く考えなければならぬような状況は避けようとする				
44	相手の立場に立つてものを考えるようにしている				
45	反対意見でも相手の意見を最後まで聞くこととする				
46	男性が家庭で料理や育児をすることは当然だと思う				
47	日本語が話せない外国人とはコミュニケーションをとりたくない				
48	新しい考え方を学ぶことにあまり興味がない				

49	物事に進んで取り組む力がある				
50	他人に働きかけ巻き込む力がある				
51	目的を設定し確実に行動する力がある				
52	現状を分析し目的や課題を明らかにする力がある				
53	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし判断する力がある				
54	新しい価値を生み出す力がある				
55	自分の意見をわかりやすく伝える力がある				
56	相手の意見に耳を傾ける力がある				
57	意見の違いや立場の違いを理解する力がある				
58	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力がある				
59	社会のルールや人との約束を守る力がある				
60	ストレスの発生源に対応する力がある				

